

山口 稔著

『社会福祉協議会理論の
形成と発展』

評者：真田 是

丹念なトレース

戦後も半世紀を超えたいま、この間の歩みを整理しようという試みはいろいろな分野・領域で見られるようになってきている。本書もそのような試みの一つだが、ただ、社会福祉協議会のこの間の歩みを整理してみるというのではなく、社会福祉協議会理論（以下社協および社協理論と略記）に焦点を当てしぼっているところに特徴があり、アトラクティブである。

ある理論の形成過程を訪ねるとなると、通例は評価の定まっている著作や論争を軸にしなから、系譜や周辺を洗って整理をするといった手法である。地域福祉理論ならまだしも、社協理論となると、本書も触れているが、このような手法が使えるような著作や論争が定かな形では残されてきていない。しかし、論争や意見の違いなどはなかったわけではない。ただ、これらが社協の活動指針をめぐるてみられるので、社協理論の形成過程のテーマでは、社協の活動指針を軸にするという手法にモディファイされることになる。

本書がとった手法は、全国社会福祉協議会に焦点を当てて、そこでの資料を中心にするというもので、したがって、全社協の歩みから社協理論形成を析出するというものになっている。ここで使われている資料は、社協関係者や研究者にとってはスタンダードなものだが、ただ初

期のものである「第1章戦後民間社会事業組織の再編と社会福祉協議会の設立」「第2章市区町村社会福祉協議会の活動方針と地区組織活動の展開」の部分は、あまり関心が向けられてこなかった時期なので、丹念なフォローが今後の研究にも役立つ。

本書のメリットの一つは、注目され関心が向けられてきた資料・文書も含めて丹念なフォローをしていることにある。関心の向けられてきた文書でも、忘れかけていた部分や、こんなことも一緒に書かれていたのかという気づきがある。

このような評価の上で、社協理論の形成はいまも進行中とさえ言えるし今後の研究分野でもあるので、この書評では、注文を中心にしていくことにする。

社協の歩みと社会の動態

著者は社協の歩みや方針にこれまでいくつかの節目があったと考えており、これが本書の9つの章立てになっている。この節目は、さきに触れたように全社協の資料から引き出しており、社協の節目としては大きな狂いは出てこない。しかし節目の意義付けとなると、全社協だけを見ているとずれや浅さに落ち込むことになる。

社協の節目は、全社協がつくってきたのではなく、社会福祉全体の動きが背景にあり、さらには戦後日本の社会経済のダイナミズムがあり、全社協はこれに反応してきたのであって、節目はこうした内容をもっている。本書は、背後の動態への目が欠落しているために、社協理論なるものが全社協の歩みと方針とイコールにされてしまって、つまりは全社協の歩みや方針が始めから社協理論の「正統」に据えられる仕組になっている。全社協の資料に拠るにしても全社協を相対化し対象化できる方法でなくてはならない。

方法としては、日本社会の動態や社会福祉の

動態を踏まえて、全社協のこれらへの対応がどう評価されるかをもテーマにできるものでなくてはならない。この方法をとると、本書の節目を使うにしても、全社協なり社協はそれぞれの節目で的確に舵を切ったのかを検討することになる。そうすると、何を基準に的確・不的確を評価するかというさらなる追究に引き込まれ苦闘することになる。しかしこのような苦闘なしの理論形成の研究ははなはだ平板なものになってしまう。

わが国の社会福祉研究の現状は、社会福祉はれっきとした社会現象であるのに現実の社会との関連を実質的に捨象するやり方が影響力をもってきた。社会を取り入れた場合でも、それは歴史的な現実の社会ではなく、「社会一般」を抽象したモデルにすぎないために、生きた現実の社会を研究しなくてもすむ。したがって、評者の上記の指摘は本書に特有なものではなく、いまのわが国の社会福祉研究がかなり広く共有しているものであり、本書の著者の責めに帰しにくい。政策動向や現実の地域社会の動態分析が薄い地域福祉や社協の研究では、この欠陥が致命的な表れ方をする。

重要な論点の扱い

本書は、節目で浮上した社協に関わる重要な論点にふれている。たとえば、1962年の基本要項に関わる住民主体の原則、市区町村社協活動強化要項に関わっての福祉コミュニティをめぐる論議、「運動体社協」をめぐる論議、事業型社協をめぐる論議などいずれも本書が言及している社協にとっての重要な論点である。

本書の論点への言及の仕方も、評者としては細かくは意見の違うところがいろいろあるが、それよりも気になったのは、重要な論点がいわばち切りの扱いに終わっていると思えたことである。

それぞれの論点が、その後の社協の歩みでも

う一度はつきり再生するといったことはあまりない。しかし、ある論点の処理の仕方、現実にとった舵の切り方が、その後の社協の歩みにどのように影響したのかという検討と評価を欠くと、社協が現実に進んできた足跡がそのまま肯定されるだけに終わることになる。この扱いからは、理論的にも実践的にも教訓は引き出せず現状肯定主義に墮してしまう。

わかりやすい例を挙げておく。社協の理論と実践の営為で、「62年基本要項の住民主体の原則」、さらには「運動体社協」の模索に至る方位と、新・基本要項から「事業型社協」に至る方位とは、そのままの延長線上に位置している方位同士ではない。転換であるのは確かで、それぞれの節目で論議がかわされた。同じ全社協の歩みでありながら転換が行われてきたのであるから、この転換の意味を探索するのは、社協の歩みや理論を跡づける作業にとっては欠くことができないポイントのひとつである。

転換の意味を、社協の理念・原則の転換とみるか方向転換と呼ぶか社会変化に応じた発展とみるかはいろいろあっていい。しかし、節目で浮上した論点在实际には再生しなかったとしても、社協の歩みや理論の形成を取り上げる場合は、節目での論議の記述で責めが果たせるものではない。本書は、節目での重要な論点を取り上げながら、その節目限りのもので切っている。

節目でかわされた論点は、現実には一定の処理・決着をしていくわけだが、歩みや理論の形成を訪ねる作業にとっては、作業するものは、現実の処理・決着とは別に独自の視座をもっていなくてはならない。処理・決着という事実の進行過程をできるだけ精緻に把握する作業とともに、事実の進行過程に呑み込まれてしまわない作業者の主体の視座の磨きが求められる。

次の評点になるが、とりわけ理論の形成をテ

ーマにする作業では、節目で浮上した重要な論点については、論点が実際にたどった経過だけでなく、重要な論点同士の間を事実の進行過程とは別に論理的に解明することがなくてはならない。社協の方針が論理的には自家撞着に陥っているかもしれない。社協が生み出してきた重要な論点の論理的な連鎖が作業者によって再構成される必要があり、これが作業者の主体としての磨きになっていくと考える。

社会福祉協議会の理論とは何か

本書の野心的な仕事を注文を中心に上げてきたが、本書がタイトルにしている社会福祉協議会の理論とは何なのかという厄介な問いにまわりつかれる。この問いにある程度の輪郭ぐらいでも得られないと、本書が提起した貴重な刺激を受けて発展させていくこともできないからである。

本書も最後の第9章第4節を社会福祉協議会理論の課題としてこのことに当てている。ここでは、社会福祉協議会の本来の性格に言及したあと、社会福祉協議会の経営論と地域福祉のネットワークづくりを社協の課題、つまりは領域の拡大として注目しているようである。

社協の理論という場合、まずは本書の言う本来の性格に関わるものがあるだろう。ただ、本来の性格は、できるだけ抽象化し形式化してどんな内容も入るような定義を追究してみても意味はない。社協の本来の性格は天から降ってくるものではなくて社会的現実によって付与されるものである。したがって、社会的現実・社会福祉の現実との突き合わせを繰り返すのが社協の理論のこの部分の作業と評者は考えている。本書とこの点では違う。

また本書は、研究を閉じるに当たって、社協についての「記述的定義」と「規定的・規範的定義」とをはっきり区別すべきだとしているが、この二つを区別したままではどういうことにな

るのか。大事なことはこの二つをどう関わらせてあっていくかである。実態と規定・規範の乖離がどうあろうと別々なものだからというのでは、社協の理論的・実践的前進はなく、現状が肯定されるだけである。

社協の理論の領域に関わってはもうひとつ触れておきたいことがある。社会福祉が社会に広がり定着すればするほど、専門分化が進むとともに理論にも分化傾向がみられるようになる。社会福祉の総体に関わる従来の社会福祉理論とともに、社会福祉内部の各分野の事業活動や労働の指針が必要になってくる。たとえば、社会福祉の理論があつてさらに児童福祉の理論があり、その上保育の理論（事業と労働の指針）や養護の理論が分化し発展する。社会福祉内部で分化した理論である（「指針としての理論」と呼んでおく）。

社協についても当然社協活動の指針を提示する研究が蓄積されるようになる。指針としての理論への要請は今後ますます大きくなっていくが、これが漫然と独り歩きすると重大な事態に立ち至ることが考えられる。

指針としての理論は、所与の社会的現実や条件に適合的につくられる。しかし理論には、社会的現実や所与の条件を変革し前進させる方針も求められる。指針としての理論は、現状適合的に終わらず現状を改善するという理論のもう一つの大事な役割を忘れてはならない。社会福祉のトータルな理論との交流が不可欠である。

社協理論の今後は、領域としては、社協の本来の性格に関わるものと社協活動の指針としての理論を二本柱にして展開されていくように思われる。

（山口稔著『社会福祉協議会理論の形成と発展』八千代出版、2000年5月、xi+352頁、2800円+税）

（さなだ・なおし 総合社会福祉研究所理事長）